

教育上の課題と工夫

これまでは 3 分野 6 領域のそれぞれにおいて、1 対 1 の個人指導または領域抄読会を活用した論文指導が行われてきた。他領域の教員が論文内容に関わるのは、研究計画検討会または研究結果検討会の機会からである。研究指導教員と院生の関係性は多少なりとも論文の完成度に影響を及ぼすことが課題の一つであった。ところが、コロナ禍では膝を突き合わせて指導する機会は自ずと遠ざかった。社会人・院生の勤務部署によっては、部外者との接触を極力避けるために、論文指導もオンライン上での展開に切り換えざるを得なかった。

これまでも県内離島在の社会人・院生とは、テレビ会議システム（Polycom）やスカイプ（Skype）を用いて、学内教室からサテライト教室に配信する方法が展開されてきた。これがウェブ会議システム（Zoom）の導入で、個人単位の参加形式となり、場所（教室）の制約が取り払われていった。研究指導においても、「画面共有」が「複数の参加者で同時に共有可能」であり、遠隔といえども自由度が格段に増した。たとえ教員が接続の詳細を分からなくても、院生が操作できると中断も起こらない。コロナ禍の現状と課題の情報交換は、授業開始前はアイスブレイキングになり、授業終了後のそれは、院生の過酷な勤務に敬意を払う機会となり、電源を切ってもしばらく余韻が残った。

臨地実習先と研究フィールドの確保では、少なからず感染拡大の影響を受け続けた。他施設での実習展開を自施設に切り換えた場合、足元を見直す機会となった。同時にベンチマーキングの視点は弱くなった。研究会、講演会、学会なども、次々にオンライン開催となり、旅費の出費はほぼ無くなった。さらに、データ収集としての面接調査では、感染防止対策を気にせず、地理的制約もなく、時間的ロスが抑えられるオンライン・インタビューが好都合でもあった。

このように院生にとっては、コロナ禍の影響はあまりない教育学習環境のように思えたが、意外にも修了院生の振り返りでは、異口同音ながら「後輩にはできるだけ対面授業を！」との声が上がった。教室内で起こる相互作用をオンライン上で展開するには、何か欠けているのかも知れない。コロナ禍のオンラインでは、脱線して横道にそれることが私の場合は確実に減った。

With コロナに向けて

大学院の特徴の一つは、ディスカッションの面白さにある。院生は主体的に学ぶ姿勢が強く、ディスカッションが活かされたときの展開は楽しい。だからこそ、グループ・ダイナミクスを活かす工夫が必要である。一方、オンラインという選択肢が加わった論文指導では、空白を埋めるだけでは足りない。研究指導教員は「正確に記述する」にむけて、ある意味では「空白を埋めたがる」存在である。そこには研究指導補助教員または副査がもたらす余白が必要である。余白の存在は、院生が詳細な問いを立て、答えを分けていくのに不可欠と思われる。そこはアフターコロナでも変わらない。
